

新時代へ 下町の スフトリ

扶桑

葛飾区の印刷会社「扶桑」は今月末、自社ブランドの製品を初めて世に送り出す。50年以上、大企業の下請けで自

転車のフレームに貼るロゴシールなどを作ってきたが、経営危機に直面。カバンや手帳、服など様々な生地に手軽に貼り付けられるシールを開発し、活路を見いだした。「会社、閉めようかな」。2015年、社長の富田曉

「脱下請け」父子で活路

さん(78)は、盆に帰省した四男・成昭さん(28)につぶやいた。

で赤字が続いた。新技術を開発しても、すぐに海外勢に追いつかれ、安価な輸入品に押されるいちごっこを繰り返すばかり。10人余の従業員のおくは60歳を超えていた。

会社の窮状を知る成昭さんは「言葉を返せなかった。高校を卒業し、18歳で扶桑に入社したが、08年のリーマン・ショックの時は仕事がなく、1週間工場の掃除だけをした。将来が不安で、建設コンサルタントに転職し、新潟県内で勤務していた。

相談を受けた成昭さんは「18歳の頃と違い、今なら何かできるかもしれない」と思った。転職先での安定した生活に後ろ髪を引かれながらも、父と同じ道を歩むことを決めた。「ただ、会社のためになることなら、何でも遠慮なく言うよ」とも告げた。

父の言葉を聞いた成昭さんの脳裏には、扶桑の従業員たちの顔が浮かんだ。

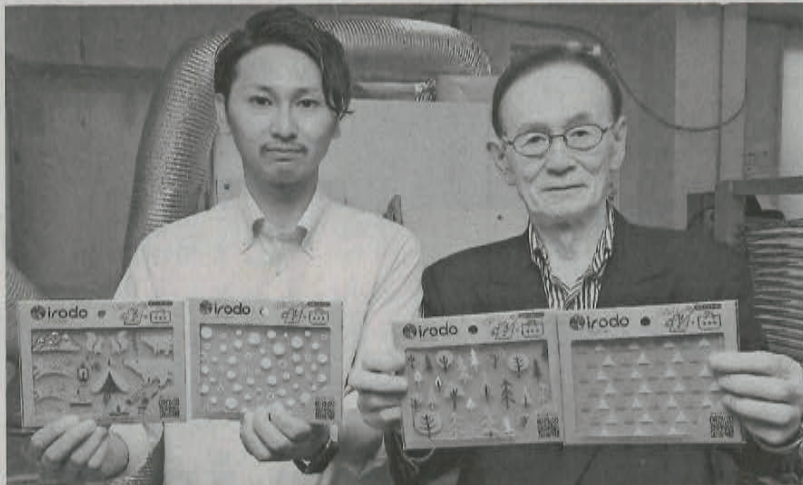
「何でも言う」との宣言通り、成昭さんは会計の見直しや新技術の導入など様々な改革を試みた。しかし、富田さんら熟練の技術者たちが作り上げた手法を変えるのは簡単ではなく、ことあるごとに衝突した。

扶桑は1964年創業。父の後を継いだ富田さんは根っからの技術者で、友人とゴルフをしているときも、アイデアが浮かぶとすぐに工場に戻るなど、新技術の開発に心血を注いだ。

「脱下請け」を目指す成昭さんは、自社ブランドの設立を目指して見本市などへの出品を始めた。「展示会に出せ

独自シールを開発

①初の自社ブランドとなる「irodo」を手にする富田さん(右)と成昭さん(11日、葛飾区の扶桑で)
②クマやリス、山のほか、幾何学模様などを簡単に貼り付けられる



表面がぷくぷくと盛り上がったシールや、アーティスティックのライフで使われるポディーパーペイント風のシールなどを生み出したが、職人気質ゆえに事業拡大には関心を持たず、仕事の多くは孫請け以下

改良を重ね、合成繊維や革、綿などあらゆる生地に貼り付けて楽しめる転写シールを完成させた。満を持して臨んだ17年度の都主催のコンテストで最優秀賞を獲得。コンテストを通じて知り合ったデザイナーと協力し、今年29日の発売にこぎ着けた。

新製品は「買った人の生活を彩るように」との思いを込め、「irodo」と名付けた。「自社ブランドを出せるとは思いませんでした」と語る富田さんに、成昭さんは「会社が培ってきた技術をもっと世に出したい。irodoはその第一歩」と声を掛けた。

「うちの技術はこんなに評価されていたんだ」と驚くとともに、将来への期待がわき上がった。

後、8日間隔で置かれた「」運転していた。

ルで、停職は重たかった」と

るような商品じゃない」と泣く父を引っ張るように会場へ連れて行った。

富田さんは、2016年10月、約300社が参加して池袋のサンシャインシティで開かれた展示会を忘れることができない。ひときわ人が集まるブースでは、成昭さんがアイロンなしで様々な布地に貼ることができると同社のシールを披露。手に取った各メーカーの担当者が感心していた。